

変わるものと変わらないものと変えては いけないものなど



柳 田 顕 郎

小生が本誌「ぶんせき」の編集委員を拝命したのは5年前のことで、規定の任期（3年）を越えて今も留任中だが、仕事振りに磨きがかからずぎりぎり^しで^いているだけの小生の現状の立場は、留任よりはむしろ「留年」がふさわしい。しかしながら、人より長く本誌の編集にかかわったことで認識を改めたこともある。それは本会会員や本誌読者の多様性や本誌の意義についてなどだ。

本会のホームページにも記載のとおり、本会会員の所属は、産官学の区別なく理系学部のほぼ全領域にわたっており、少なくとも小生は会員分布がこれほど多様性に富む学会を他に知らない。このことは本会会員にとっては当たり前の事実かもしれないが、よく考えれば、科学分野における「分析化学」という学問の特徴と密接にかかわっていることに気付くはずだ。

例えば、小生は大学で「分析化学とはなんぞや」という話を学生に講義することがあるが、これが意外と難しい。何年か試行錯誤した結果、デジタル世代の学生には次のように話す（良くも悪くも）納得してくれることがわかった：「分析化学というのは、サイエンスという未開のフィールドを探検するために絶対必要な「武器と魔法」について研究したり開発したりする学問です」。

だとすれば、分析業務に従事する研究者や技術者は、一般人から見ればさしずめ「魔法使い」や「超能力者」かもしれないが、本会は術者が集結する「梁山泊」のようであり、本誌は術者必携の指南書や攻略本に相当するかもしれない。例えば幼稚で恐縮だが、言いたいことは、分析化学はサイエンスの発展に必携・不動の学問であり、関連研究者は理系の全領域にわたっており、本誌「ぶんせき」はそのための指南書の役割を担っている可能性があるということだ。

今後、大規模な天変地異や政情悪化がない限り、分析技術や分析機器は必ずやさらに飛躍的な進化を遂げて「変わっていく」はずだ。それは分析関連企業や業界のあり方を揺さぶる震源にもなるだろう。しかし上述のとおり、サイエンスの舞台における分析化学の位置付けやニーズはほとんど「変わらない」。大学での分析化学の講義が無くなることもない。だからこそ、本会は（多様性を維持しながら）この先も存続させるべきであるし、そのような意思是「変えてはいけない」ものだと思うのだ。ただし、本会の運営に際しては、変えるべきものと残すものの取捨選択が必要となるだろう。その一つとして「冊子体」としての本誌のあり方も問われ始めているのだが――

小生の願いはただ一つ、本誌の外観がどうなるうとも、（会員外の人を読んでも）面白くて役に立つ指南書としての個性を有する本誌の伝統のスタイルを、どうか「変えないで欲しい」と思うのだ。

〔Akio YANAGIDA, 東京薬科大学薬学部, 「ぶんせき」編集副委員長〕